

合唱の会に込められた思い

いつでも どこでも だれとでも それは私たち「職員」も

2学期が始まりました。数日の秋休みでしたが、気のせいかもしれませんが、子どもたちがまた少し大きくなったように感じます。

始業式で校長先生がビバルディの「四季」より「秋」にふれてお話しをしてくださいました。こういう話の展開はだれでもできるわけではなく、吉川校長先生だからこそできるお話で、私もさっそく聴いてみました。ぜひ時間を見つけて校長先生が始業式で紹介した曲ですと子どもたちに紹介し、先生方も一緒に聴いてみてください。

秋休みから入学選考や外国語公開研究会に向けた準備が始まりました。外国語公開では授業者はもちろん、運営面も全て小学校の先生方が対応するので先生方には頭が下がるばかりです。

運営委員会が昨日行われ、1学期の学校評価と合唱の会をメインに話し合いが行われました。先生方の意見から「働き方改革」がまだまだ実感を感じていないことを痛切に感じました。運営委員会でもお話ししましたが、小さな改革を継続していくことが大きな変革につながると私は思っています。だれも通ったことのない道です。暗中模索は覚悟の上で一緒に進んでいきましょう。

今年からイズミティに合唱の会の会場が変わり、行事部の先生方には座席割や子どもたちの動線を含め全て0から計画を作成していただきました。限られた時間の中で下見をして、綿密な「実施要項」を作り上げる力はやはり「附属の先生」のなせる技だと感心しました。

さて、合唱の会の目的ですが「もくせい30号」に当時の合唱の会担当佐藤 崇先生（前副校長）が次のように書いています。

（前略）附属小の合唱は合唱の質を高めることを求めることもさることながら、その基盤には担任と子供、学年、学級の子供同士の人間的なつながりを深めたいという願いが込められている。この合唱活動の集大成が合唱の会である。（後略）

まさにここに集約されています。当日の発表も大切ですが、合唱を創りあげていくプロセスに大切な意味があるのです。

私は音楽も苦手でした。だから最初に附属小に来た時に自分が合唱の指揮をする、ということには非常に抵抗がありました。時々、音楽専科の先生に指導をお願いしましたが、最後は自分がやるしかありません。それは、自分と子どもたちとのことだからです。

今年から、職員合唱への取り組み方が見直されました。

職員合唱は私たちにとっても、音楽部の先生方から合唱指導について学ぶことのできる研修の場であり、職員が同じ時間を共有し、子どもたちと同じように合唱を創り上げることを通して職員の一体感を高める貴重な機会でもありました。

昔を知るものからすれば昔日の思いはありますが、先生方を信じて「新しい合唱の会」を一緒に創っていきたいと思っています。

（副校長 手代木）